保育者養成における実習指導についての一考察

－実習受入現場でのアンケート調査から－

Study of laboratory work in childcare person training
－ Questionary survey of the nursery school staff －

戸　川　　俊
Satoshi Togawa

はじめに

保育者を目指す養成校に通う学生はそのカリキュラムの中で、講義、演習、実習といった様々な形式の授業を受け、専門的知識や技能を身につけて保育者となる。しかし、保育現場では近年の社会状況や子育て環境の変化に応じて子どもや保護者の保育に対するニーズは極めて多様なものとなり、それに応じて保育者に求められる資質も従来よりも多面的なものになりつつあるといえる。このような状況の中で、保育者養成校では未来の保育者を目指す学生たちに対し、多面的な保育の質の向上が達成できるように指導することが必要とされる。これらのことは、全国保育士養成協議会の研究報告にも挙げられており、保育者養成校で求められる保育者像を改めて考えなければならない。

それに加えて、このような現状では、現場での多面的な保育の質の向上を達成することは益々困難になるものと考えざるを得ない。そのような状況の中では、髙橋らが指摘するように保育者養成校と保育所との連携の必要性が極めて重要な役割を担うことであろう。すなわち、保育者養成校は実習施設（現場）ではどのような保育者が求められており、そのような保育者を養成するためには、養成校でどのような力をつけておかなければならないかといったことに関する綿密な情報交換が必要になってくるということである。このように保育者を目指す学生を指導するためには、養成校側の指導だけではなく、実際に実習を受け入れている実習施設との綿密な連携が今後必要であり、この綿密な連携によって実習の充実、多面的な保育の質の向上が図られるものと考えられる。そこで本研究では、保育者養成校と実習施設との連携の中で交換されるべき情報の内容を明らかにするために、実習を受け入れている保育現場ではどのような実習生を求めているかについて、保育技能と実習姿勢などの調査を実施し、保育者養成における実習指導のあり方を考える一助としたい。

方　法

１．調査対象及び内容について

新潟県内の公立保育所15箇所、私立保育所13箇所、計28箇所の保育所に勤務する保育者を対象としてアンケートを実施した。アンケート対象者は園長、主任保育士、正規職員、臨時職員を含むすべての保育者を対象とした。

２．調査内容

⑴　調査期間

調査期間は2013年６月から2013年９月の期間に行った。

⑵　質問内容

質問内容については以下の通りであり、無記名方式のアンケートを実施した。

①　実習生に事前に学んでほしい子どもの遊びについて

実習生に事前に学んで欲しいことに関しては、特に子どもの遊びに関わる内容として重要であると考えられる手遊びについて、昔から伝わる遊び（かごめかごめなど）について、運動遊びについて、絵を描くことについての４項目の中から選択する形式とし、複数回答を可能とした。また上記の４項目に当てはまらないものがある場合はその他の欄に自由記述で書くよう設定した。

②　ピアノの弾き歌いについてどの程度弾いてほしいか

ピアノの弾き歌いについては、保育実習で苦心する実習生が比較的多く、保育者養成段階で十分に身につけておくべき内容であると考えられることから、保育現場でどの程度の演奏レベルが求められているのかを明らかにするために質問した。回答を求める演奏レベルについては片手で弾く程度、両手初級（バイエル初級程度）、両手中級（童謡が弾ける程度）、両手上級（ソナタ・ソナチネ程度）の４項目から選択する形式とした。また、この質問事項についての意見を自由記述で回答する項目も設定した。

③　実習生に子どもたちの前でしてほしい保育実技について

自由記述で回答できるよう設定した。

④　実習生に一番望むことについて

実習生に一番望むことについては、本アンケート調査を始める前年に実習巡回にて保育所長及び実習担当の保育士からの実習指導の内容で多く挙げられていた明るさ、謙虚さ、積極的、熱心さ、子どもに対する礼儀といった性格面、態度面に関するもの５項目から選択する形式とし、複数回答を可能とした。また上記５項目に当てはまらないものがある場合はその他の欄に自由記述で書くよう設定した。そして選択した項目に対してその項目を選んだ理由を「④で回答をいただいたものに対してその理由や補足説明、具体例などのコメントをお願いいたします」と自由記述で回答できる項目を設定した。

⑤　その他実習生に対しての意見

質問事項①から④の質問事項以外に実習生に対しての意見を自由記述で書くよう設定した。

⑶　調査方法

アンケート用紙は各保育所へ実習巡回を行った際に調査趣旨を園長に伝え配布を行い、回答後、返信用封筒で回収を行った。260名の回答があり、回収率は72％であった。

結果及び考察

1．「実習生に事前に学んでほしい子どもの遊び」について

保育者に対して実習生が実習前に学んでほしい子どもの遊びについて尋ねたところ、「手遊びについて」と回答した保育者が60％であった。手遊びは子どもたちとかかわる際に特に大掛かりな道具を必要とすることが少ないものも多くあり、子どもたちと身近に触れ合うことのできる保育実技であるため、実習前に学んで欲しい遊びとして重視されていると考えられる。また、質問③「実習生に子どもたちの前でしてほしい保育実技について」の自由記述の中で、手遊びについて「実習生の手遊びは最近のものでわからないものもあるので私自身も勉強になります」との回答があったことから、実習を指導する保育者自身も養成校で学ぶ最新の手遊びを学びたいという思いも窺える。これらのことから、子どもたちとすぐ関わることができ、大掛かりな準備物を必要とするものが少ないものも多くある「手遊び」を事前に学ぶことが必要であろう。次に多くの回答を得たのは、「昔から伝わる遊び（かごめかごめなど）について」、「ごっこ遊びについて」であり、共に18％であった。昔から伝わる遊びについては、厚生労働省の保育所保育指針解説書では「保育所に高齢者や地域の方を招き、伝承遊びを教えてもらったり、昔話を語ってもらったり、伝統芸能などを披露してもらったりすることは、人に対する親しみや感謝の気持ちを育む上で、重要な機会」[1]とあることから、昔から伝わる遊びを伝えることも保育者としては必要なことであり、実習前に学ぶべき子どもの遊びとして重視されているのであろう。また、「ごっこ遊びについて」の回答に関しては、明神が「ごっこ遊びは子どもの創造

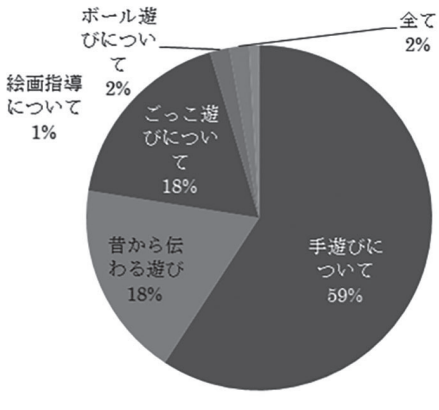

図１．子どもとの遊びについて

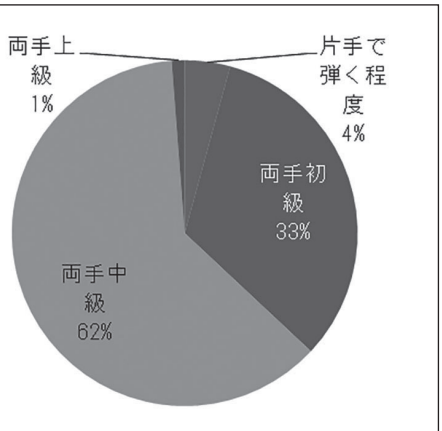

図２．ピアノ弾き歌いについて

的想像力の基盤である」[2]と述べている。このように、ごっこ遊びは遊びの原点を根本で支えるものであることに加えて、子どもたちの人間関係を育み、子どもたちを取り巻く様々な環境についても学べるものであることから、実習前に学ぶべき遊びとして重視されているのであろう。その他の結果については、「運動遊びについて」が４%、「絵を描くことについて」が２%であった。またその他の項目に「全て」との回答が４%であった（図１）。

２.「ピアノの弾き歌いについてどの程度弾いてほしいか」について

保育者に対して実習生がピアノの弾き歌いについて事前に身に付けてほしい程度を尋ねたところ、両手中級（季節の歌、童謡が弾ける程度）が62%、両手初級（バイエル程度）が33%、片手で弾く程度が４%、両手上級（ソナタ・ソナチネ程度）が１%という回答が得られた。（図２）また、上記回答以外にその他コメントを頂いているものを以下に挙げる。

⑴　「得意、不得意があると思います。一日実習や卒業し現場で必要な程度をしっかり身に付けることが大切だと思います。また、ピアノが苦手ならば違う方法でも歌を教えることができます」

⑵　「季節の歌が弾けるのは当たり前だと思いますが、その園に合ったピアノが弾けると尚更良いと思います」

⑶　「多くは望みません」

⑷　「ピアノは上手な方が良いと思います。子どもたちの前で弾くことで自分の力や自信につながるので学生時代に沢山練習された方が良いと思います」

ピアノは長期的な訓練により身につくものであり、また楽譜を読む力やリズム感も必要とされる。そのため、養成校へ入学してからピアノの演奏技法について指導を受ける期間も養成機関によって様々であるため能力差が生まれることも考えられる。厚生労働省、保育所保育指針の表現の内容に「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう」[3]とある。その内容に対して保育所保育指針解説書には「子どもの表現しようとする気持ちを大切にして環境設定を行うとともに、生活経験や意欲と遊離した特定の技能の習得に偏らないよう配慮することが必要」[4]とあることから保育者は、子どもが日常的によく歌う季節の歌や童謡に伴奏が付けられる程度のピアノの技能の習得が必要と考えられる。その点から両手中級（季節の歌、童謡が弾ける程度）の回答が多かったのではないかと考えられる。また、両手上級よりも両手初級を求める回答が多く挙がっている理由として、「得意、不得意がある」、「多くは望まない」とのコメントからもわかるように現実的な判断が関与しているためではないかと思われる。そして「保育士等は、子どもにとって心地良い音楽、楽しめるような音楽との出会いを大切にしていかなければならない」[4]とあることから実習期間中に子どもたちの前でピアノを弾くことを多く経験することや音楽を子どもたちと楽しめる遊び等の技術を身につけることが必要であろう。

３.「実習生に子どもたちの前でしてほしい保育実技」について

「実習中子どもたちに対してしてほしい保育実技はあるか」について自由記述の結果に関しては回答を項目ごとに分け集計を行った。結果として、「自分の特技などやってみたいこと」という回答が37%であり、そのコメントの中には、「今まで勉強してきたものをたくさん用意してきてこの機会に積極的に披露し、自信をつけてほしい」、「実習生が子どもたちの前でしてみたいということ（気持ち）が大切であって、私たち（保育者）から望むものではないと思う」といったものがあった。汐見・大豆生田は保育者の専門性の一つとして、引き出しの数を多く持ち努力を怠らないようにすることを挙げており、保育者はたくさんの経験を積み、保育技能を習得することが必要であることが指摘されている。保育者は、人前に立ち子どもたちや保護者に対して関わることが多いことから、まずは人前に立つ経験を数多く積み、自分自身に自信をつけることの重要性を学生に伝えることが大切であると考えられる。続く回答としては、絵本の読み聞かせ23%、手遊び18%、子どもたちが楽しめる自己紹介８%、子どもとのかかわりを深めてほしい４%、挨拶２%、その他８%の回答が得られた（図３）。保育の中で、保育者がよく行う活動である絵本の読み聞かせや手遊びが重視されていることが窺えよう。その他の項目に分類した回答内容では、「箸を正しく持つ」、「手品」、「創作ダンス」との意見があった。子どもたちと直接関わる経験ができる実習では、絵本の読み聞かせや手遊び等のレパートリーを増やし、実習生自身が子どもたちに対して実施してみたいことを多く挑戦することが大切であろう。

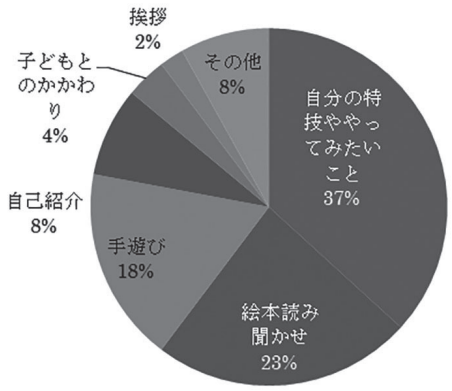

図３．実習生にして欲しい保育実技

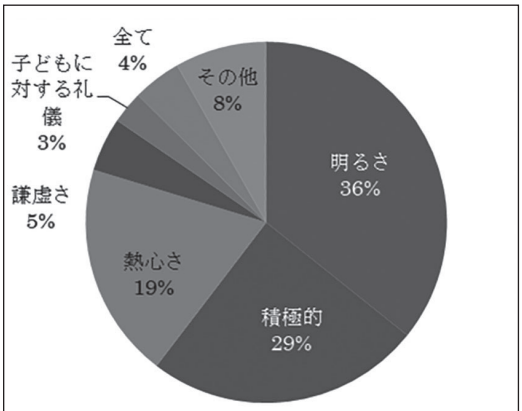

図４．実習生に一番望むこと

４.「実習生に一番望むこと」について

実習生に一番望むこととして性格面・態度面に関わる５項目に対する回答結果は、明るさ36%、積極的29%、熱心さ19%、謙虚さ５%、子どもに対する礼儀３%、全て４%、その他８%であった。その他として挙げられていた内容は、「素直さ」、「挨拶」、「社会性」、「大人に対する礼儀」であった。

なお、その他と分類した中に「全て」という回答が多くあったため、「全て」と回答したものを集計した（図４）。回答した内容に対しての自由記述については、主なものを項目ごとに表１に挙げた。最近、保育現場では「近年、精神的、体力的に弱い実習生が増えてきている」との指摘を受けるようになってきた。精神的、体力的に弱いという傾向が強ければ、当然のこととして「明るさ」を保つことも難しくなるであろう。そのために、保育者は「明るさ」を持つ実習生が減ってきていると感じることが多くなったことで、実習生に望むこととして「明るさ」を挙げる回答が多かったのではないかと考えられる。表1の「明るさ」に対するコメントとして「元気いっぱいの先生が大好き」、「いつでも笑顔でいてくれる実習生は、子どもたちが親しみやすい」、といった内容が挙げられている。笑顔や元気といった、活力を持ち合わせる学生は子どもたちも親しみを持って関わることができるであろう。この点からも「明るさ」が求められていることが理解できる。次に多く挙げられている「積極的」、「熱心さ」については、表１の「積極的」に対するコメントに「どんどん動いて失敗してもそこから

表１　「実習生に一番望むことについて」自由記述項目別回答

項　目	記　　述
明るさ	１．いつでも笑顔でいてくれる実習生さんには、子どもたちも親しみやすいと思います ２．子どもたちは元気いっぱいの先生が大好きです ３．笑顔が少ないように感じます。もう少し子どもたちと楽しんでほしい
積極的	１．○○しましょうか！と自分から声を発する姿勢が大事です ２．子ども達と触れあえる時間に特定の子とだけでなく沢山の子に関われる積極性が大事です ３．実習は現場で学べる機会なので、どんどん動いて失敗してもそこから学んでもらいたい
熱心さ	１．頑張っている姿は、誰から見てもステキでほほえましいことだし、子どもたちにも絶対に伝わると思います ２．実習している組には担当の保育士がいるので、暴走して出すぎないように、場面を考えて動くと良い
謙虚さ	１・子どもの前、保育者、職員の前での謙虚さは、実習生の時から、働く上でもとても大切なことだと思う ２．職員から指導を受けた後の姿勢も大切だと思います
子どもに対する礼儀	１．言葉使い、姿勢全て人生の先輩として、きれいな見本で接していただきたい ２．子ども、大人に対するあいさつや礼儀は大切であり、子どもが一番良く見ている
その他	１．臨機応変に対応できるといいと思います。人様の子どもを見るという責任感を持って欲しい

学んでもらいたい」や同じく表１の「熱心さ」にある「頑張っている姿は、誰から見てもステキでほほえましい」とのコメントが挙げられており、学生には現場でしか経験できない実習という学びの中で頑張って何度も挑む姿勢が大切であると認識されていることから、「積極的」、「熱心さ」の回答が「明るさ」に次いで多く挙げられたのではないかと考えられる。この結果から実習生に対しては、保育者の資質として、明るさを持ち、様々なことに対し熱心に積極的に実習に挑む姿勢が大切であることを意識づける指導が必要になるであろう。さらに、表１の謙虚さにある「職員から指導を受けた後の姿勢も大切」や熱心さにある「場面を考えて動くと良い」子どもに対する礼儀にある「言葉使い、姿勢全て人生の先輩として、きれいな見本で接していただきたい」、「あいさつや礼儀は大切であり、子どもが一番良く見ている」などの回答は主として社会性や日常生活における礼儀作法、マナーを重視することに関するものである。この結果から、保育者養成校においても、学生に社会性や生活マナーが身につくような教育的指導も必要であることが示唆される。

５.「その他、実習生に対しての意見」について

本項目に関する回答について、主要なものをいくつか表２に示した。この項目に対する回答には、「失敗を恐れない」「注意を前向きに捉える」「指示待ちではなく進んで聞く」「記録を残す」「雑用などにも積極的に取り組んで欲しい」など、実習に対する積極的な心構えに関する意見が多く挙げられていた。これらの結果は、保育現場では実習生に積極的に実習に取り組むことが強く求められていることを示唆している。養成段階においても学生に何事にも積極的な姿勢を持つことが大切であることを特に強調する必要があろう。また、保育者としてだけではなく表２にある「どこの職場でも、人との関わりが主になってくるので、子ども対自分だけにならないように気配りや声に出しての実習の取り組みが感じられると良いかと思う」というコメントに反映されているように、社会人としての心構えについても重視されていると捉えることもできよう。谷田貝・上野は「最近の学生の印象は、ひとことでいえば“常識”に欠けている」[5)]と指摘している。また同じく谷田貝・上野は「子どもを保育するプロでも、あいさつのしかたから、電話の応対のしかた、父母とのやりとりなど、もう少し何とかならないものかと思うことが多々あります」[5)]とも述べている。これらの指摘から、保育者養成段階においても、社会人としてのあり方、心構えといった社会常識に関する修練が極めて重要な課題になるといえよう。本研究の調査対象は、園長職など管理者、正職員、非常勤職員を含めた保育者であった。このことから本研究の結果は、現場で活躍している様々な立場の保育者が感じる「実習生の現状」と新任保育者の現状を踏まえたものであると捉えることができる。本研究で明らかにされた保育実習受入先で求められる実習生像は、ひいては保育現場が求める保育者像に繋がっていくものとして捉えることができるであろう。

表２　「その他実習生に対しての意見」について自由記載

記　　述
１．実習をさせてもらっているという気持ちを忘れずに、自分なりの目標を持って、子どもと関わると良い
２．うまく行かなかったり失敗したりすることがたくさんあると思いますが、そこから何を得て行くかが大切だと思います。先生方の注意や助言も前向きに受けとめこれからの糧としていってほしいです
３．最近の実習生は疑問に思っていることをその場で聞くことをあまりしないような気がします。保育士に聞くことも学びの一つなので、失敗を恐れず、どんどん現場での疑問を聞いてほしいです。挨拶など、基本的な礼儀も身につけてもらいたいと思います
４．明るさと元気の良さは必要ですが、子どもに対する優しさも必要。子どもと接することだけが保育者の仕事ではなく、そうじ、洗濯、整理整とん等様々なことにも積極的に手伝う姿勢がほしい
５．明るく元気に保育することで子どもたちも職場の雰囲気も良くなります。その上で何事にも積極的に関わり、経験を積んで欲しい。「指示待ち」の生活をしてきた学生が多いと思われますが、それではダメだという事を実習を通して感じ、今後に生かしてほしい
６．実習生自身が生きてきた経験がすべて実習に出ます。実習で、反省できる人、考えることができる人が現場で活躍すると思います。本来なら、中学、高校や家庭で学ぶことですが人間として生きていくうえでの経験を持たせてほしい
７．実習日誌は、保育士として勤務してからもとても役に立つ宝物となるように経験したこと、予想外の子どもの行動、言葉掛け等できるだけくわしく記入してもらうと良いと思います
８．子どもの相手も大事ですが、雑用も積極的に取り組んで欲しいと思います
９．どこの職場でも、人との関わりが主になってくるので、子ども対自分だけにならないように気配りや声に出しての実習の取り組みが感じられると良いかと思う

結　　論

本研究の主な結果から、実習受入先である保育現場では保育技術だけではなく、礼儀、作法といった社会性に関わるスキルも必要であり、保育者の前段階である実習生の時点でこれらのことを身につけて欲しいと認識されていることが理解できた。このことから保育者養成校では、保育実習指導だけではなく、日々の生活全般にわたる教育的な指導も必要であると考えられ、今後は保育者養成カリキュラムの中にもこのような視点を盛り込む工夫も必要になってくるといえるであろう。

本研究では保育所保育士のみが調査対象であったが、今後の研究では、幼稚園教諭も対象とし、比較をする中で、現場で求められる保育者像における幼保の違いを明らかにし、今後進められるであろ

う幼保一元化の際に問題となる課題についても明確にしていく必要がある。さらに、養成校で学ぶ学生に対しても調査を行い、現場と学生の意見を照らし合わせることによって、より良い実習指導、学生指導のあり方を探っていく必要があろう。

引用文献

1）厚生労働省、保育所保育指針解説書、厚生労働省、pp.73、2008
2）明神もと子、幼児のごっこ遊びの想像力について、釧路論集北海道教育大学釧路校研究紀要　第37号、pp.149、2005
3）厚生労働省 、保育所保育指針、厚生労働省、pp.21、2008
4）厚生労働省 、保育所保育指針解説書、厚生労働省、pp.95、2008
5）谷田貝公昭・上野通子、『これだけは身につけたい保育者の常識67』、一藝社、pp.３、2010

参考文献

1）全国保育士養成協議会編、平成25年度専門委員会課題研究報告書、pp.153－167、2013
2）髙橋滋孝・髙橋久雄・松田典子・三浦修子・髙橋智宏・長谷川育代・廣瀬優子・髙橋紘、人材確保・育成に関する保育士養成校と保育所の連携に関する研究（パート２）～安全教育を取り入れた実習の工夫～、保育科学研究　第３巻、pp.16-32、2012
3）汐見稔幸・大豆生田啓友、『最新保育講座②保育者論』、ミネルヴァ書房、pp.173－177、2012

謝　辞

この度は、ご協力いただいた新潟県内、公立・私立保育所の保育者の皆様にご理解を頂き感謝いたします。また、本論文を作成するにあたり、ご助言をいただきました先生方に深く感謝いたします。